

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-5

「お飲み物は、いかがなさいますか？」

会話の腰を折らない頃合いをみて、マネージャーが注文を伺った。

「そうだね……。貴女は？」

「司教(ビショップ)にお任せします」

「ハハー、王妃様！それではナイト(チェス駒の騎士)に申しつけましょう。ワイン・クルーズ・シーズンの限定ワインリストを！」

大仰ぶって命じた辰巳は、怪訝な面持のマネージャーに「君、チェス用語だよ。ほら、こんな感じで駒を動かす……」と手ぶりをみせてから、「この方はこう見えてもチェスのなかなかの使い手でね。そこがまた魅力なんだよ」とまことしやかにのたまう。

「辰巳さん、ゲームセット。降参です」

真紀は、この辺が潮時と見て、あっさりと投了した。

「え、ひどいなあ。人がチェック(王手)をかけてもいないのに～」

真紀の心外な出かたに面喰った辰巳は、不服を唱えた。

「今日からオークラファンです」

「エッ？」

「バンケットには何度か来ていたのですが、いつもとんぼ返りでした。ともかく、辰巳さんの妙手に完敗です」

「ほう、キングも登場しないうちから？ヘンチクリンダナ～。貴女らしくない」

「ですから、妙手と申し上げました」

真紀は、わざと拗ねて見せた。

真紀としては、早めに本題に入りたかったし、仕事柄、辰巳のような人の扱いは弃えていたので、その間合いは絶妙だった。

「こちらがシャサーニュ・モンラッシェ・ドメーヌ・ラモネ 2008 年です」

ソムリエがワインクーラーに冷やされている白ワインを、ラベルが見えるようにして確認をとってから抜栓した。

「テイ스팅はいいから」

辰巳が促したので、ソムリエは先に真紀のグラスにワインを注いだ。

「赤も良いけど、どうですか？」

辰巳が、軽くスナップを効かせてグラスを回し、鼻に近づけ、ひと口味わってから聞くので、真紀も、ひと口飲むと、フッと息抜きをして、満足げに頷いた。

「香りが開くまで時間がかかります。奥行きを秘めているワインですので、ほどほどに冷やしてあります」

ソムリエが、ひと言添えた。